

鈴とはんこ

小林倫子

登場人物

修一（しゅういち）

祝子（のりこ）

闇の中でチリーンと鈴の音が響く。

次第に明るくなると男・修一が黙々と机に向かって小さな

石のようなものを小刀で彫り付けている。机の脇には大きく

「はんこ・印章」と書かれた古い立看板。修一、彫っている

はんこを光に当てて見分し、また俯いて一心に彫り始める。

再びチリーンと鈴が鳴る。男、顔を上げる。

祝子が入ってくる。

祝子　こんにちは。

修一　やあ、祝子ちゃん。こんにちは。

祝子、怪訝そうにあたりを見回す。

祝子　誰かいた？

修一　誰も。

祝子　これ、お母さんから修一兄ちゃんに。店のだけど。コロッケばつか
でごめんね、メンチは売り切れちゃって。

修一　とんでもない、助かるよ。お、あったかい。

祝子　一応揚げたて。

修一　ありがとう。肉屋のコロッケって謎に美味しいよなあ。

高齢者のいる男所帯じゃなかなか揚げ物はやらないからさ。

祝子　こっちの煮物とお浸しも。おじいちゃんどうぞ。

修一　いつも悪いね。

祝子　綺麗ね、そのはんこ、石？

修一　この今彫ってるやつ？

祝子　うん。

修一　落款だよ。

祝子　らっかん。

修一 日本画とか、書道の作品に押すんだ。

祝子 ああ、あれ！へえ、そういうはんこも作るんだ。

修一 うん、プロの人は自分で彫る事も多いけどたまにね。

祝子 おじいちゃんは？

修一 先代？病院。

祝子 どこか悪いの。

修一 年だから定期健診みたいなものだよ。

祝子 良かった。この頃修一兄ちゃん一人で仕事してるのよく見かけるから。

修一 ああ、先代も手はまだまだ動くんだけど目の方がね、あまり長く作業すると疲れが出るみたい。休み休みやってる、心配ないよ。

祝子 大丈夫？

修一 ここが少し暗いから、中で作業してることも多いんだ。

祝子 そう。

修一 ありがとう。

祝子 おじいちゃんも修一兄ちゃんがいるから安心ね。

修一 どうか、怒られてばかりだよ。

祝子 ううん、あいつがうちに来てくれて助かったって、この間お父さん

と呑んだ時酔っぱらって言ったもの。はんこ屋は俺の代限り
と諦めてたって。

修一 ははは、ならいいけど。

祝子 あのね、私、結婚するの。

修一 えっ。(鈴がチリーンと鳴る)

祝子 ん？

修一 いつ。

祝子 来年の春。

修一 えー、びっくりしたなあ、それは、おめでとうございます。

修一、深々とお辞儀をする。

祝子 ありがとうございます。

祝子、深々とお辞儀をする。

修一 あの小さい祝子ちゃんがね、こーんなんでそりやもう可愛かった
んだよ。僕も年食う訳だ。先代の事を言ってられないな。失礼、

祝子ちゃん今何歳だっけ。

祝子 十九。

修一 十九！(鈴がチリーンと鳴る)

祝子 ん？

修一 ちよつと早いんじゃ……。いやいいけど。

祝子 来年の春には二十歳になつてゐるわ。

修一 そうかあ……。しかし随分と急だね。

祝子 ほんとに結婚するつもりじゃなかつただけだ。

修一 え？

祝子 二ヶ月前にお見合いしたんだ。

修一 お見合い！（鈴がチリーンと鳴る）

祝子 ねえ、猫でもいるの？

修一 いないよ。いや、驚いたな。

祝子 親戚のおばさんがね、半分冗談で話を持ってきて、私も半分冗談で行つてみたの。綺麗な着物着て、ちよつといいレストランでごはん食べるなんて素敵でしょ。テーブルも椅子もお料理もお庭も凄く綺麗だったのよ。

修一 はー……。。

祝子 ほら、私綺麗なものが好きだから。

修一 で、美味しかったかい？

祝子 え？

修一 そのお見合いの席での凄く綺麗な食事は。

祝子 とってもとっても美味しかったわ。

修一 そりゃ良かった。

祝子 特にええと、冷たいジャガイモのスープ！

修一 ああ、ヴィシソワーズ。

祝子 そうそれ。こんな小さなお猪口みたいなグラスで出てきて、私あんまり美味しいもんだから、ペロツといった後、きっと悲しさが顔に出たのね、そしたら彼……お見合いの相手が僕のもどうぞって。

修一 それが結婚の決め手？

祝子 まさか。でも優しいなって思った。決め手はごはんが美味しかったから。

修一 ほう。

祝子 家族以外の人とごはん食べるの得意じゃないの。仲のいい友達でも。だけどあの人とは美味しく食べられた。

修一 なるほど。

祝子 どうでもいい事ばかり沢山喋ったのに、あっちもなんだか楽しそうで、そしたら話がトントン進んじやって。変かな。

修一 いいや。大事なことだよ。

祝子 いい人だと思う。私の話を丁寧に聞いてくれる、静かな感じの人。

修一 うん、そうか。

祝子 ふふ。私あまり頭良くないし、就職も失敗しちゃったからどうしようかなとはちょっと思ってたんだ。それもある。ちょっとだけ。

修一 そんなこと。

祝子 ちょっとただだよ。

修一 ちゃんと肉屋さん手伝ってるじゃない。

祝子 うん。お父さんもお姉ちゃん夫婦もずっと家にいて店手伝えって言ってる。

修一 お見合い結婚なのに反対されてんのか、珍しいな。

祝子 反対じゃないけど戸惑ってる。心配してるのかな。

修一 だろうね。

祝子 修一兄ちゃんも心配？

修一 僕は無責任で薄情だから。

祝子 あはは。

修一 祝子ちゃんは不安じゃないの。全然知らなかった人でしょう？

祝子 よくわかんないなあ、でもね。

修一 うん。

祝子 一緒に食べるごはんがどんどん美味しくなってるの。だから、

大丈夫かなって、なんとなくこの先楽しそうかなって。そんな感じ。

チリーンと鈴の音が鳴る。

祝子、首を傾げる。

修一　・・・そんな感じなんだねえ、そうか。

祝子　そうなの。

修一　祝子ちゃんは祝子ちゃんが自分で思うよりずっと賢いよ。生きるセンスがある。僕なんかよりよっぽどね。周りの人を幸せにするよ。

祝子　ええ、そうかなあ。

修一　だから大丈夫。

祝子　そう言ってもらえるとほんとにそんな気がする。

修一　祝う子と書いて祝子なんてそのまんまだ。いい名前を貰ったね。

祝子　うん、ありがと。

修一　ダメだったら戻って来りゃいいさ。

祝子　そうね、すぐ近くだし。

修一　そうだよ。

祝子　ほんと無責任。

修一　若いって凄いな、驚かされてばかりだ。

祝子　修一兄ちゃん若いじゃない。

修一 そんな事言ってくれるの祝子ちゃんだけだよ。もう兄ちゃんです

らなくなってるし。いやあでも驚いた。

祝子 その兄ちゃんにお願いがあるんだ。

修一 おお、何でしょう。

祝子 はんこを作って欲しいの。

修一 なんだ。それならお任せ下さい。とびきりの作るよ。

祝子 本当？嬉しい。

修一 勿論。長く使うものだからね、ちょっと無骨だけど頑丈な黒水牛で

作ろうか。

祝子 黒水牛？

修一 水牛の角だよ。丁度今朝良質なのが届いたんだ。その中でも一番

良い所を使おう。

祝子 私さっきの綺麗な石がいいな。

修一 落款の？

祝子 そう。

修一 うーん、あれは脆くて欠けやすいからなあ、欠けやすレが味に

なる分実印には向かないんだ。段々銀行印も要らなくなっては

きてるけど、縁起物だし・・・

そうだ、苗字を教えて貰っていいかな。

祝子
内田よ。

修一
ウチ・・・あれ、結婚相手の人ウチダ精肉店の婿養子に来るの？

祝子
ううん。店はお姉ちゃん夫婦が継ぐのよ。

修一
だよね。じゃあその人も今の苗字と同じ内田さん？

祝子
ううん、ヤマギシさん。

修一
ああ、夫婦別姓。

祝子
ううん、ヤマギシ祝子になるわ。

修一
苗字が変わるのに今の苗字の判を作るのかい？

祝子
そうよ。

修一
・・・どういう事だろう。

祝子
あのね、結婚が決まってからテープがブツブツ切れるの。

チリーンと長く鈴の音が響く。

祝子、辺りを見回す。

修一
ごめん、何を言っているのかさっぱりわからないよ。

チリンチリンと鈴の音が鳴る。なんだか頷いているよう。

祝子
ねえ、やっぱり何かいるよね？

修一
何が。

祝子 だってさつきから鈴の音が。

修一 ああ、これか気にしないで。

祝子 気になるよ。

修一 うーん。

チリーンと弱弱しく鈴の音。

修一 わかった。紹介するよ、こちら僕の奥さんの鈴子さんです。

チリンと短く鈴が鳴る。

間

修一 鈴子さんは僕がここに来る前に病気で死んじゃったのに、今もずっと側にいてくれてるんだ。

間

修一 怖がらせたらいけないと思って。今まで黙っててごめんね。

祝子 修一兄ちゃん結婚してたの!?

修一 そこかあ。

祝子 わあ、びっくり。はじめまして・・・じゃないのかな、いつもお世

話になっております！ずっといたなんて凄い！

修一 さすがだなあ。怖くない？

祝子 ちっとも。修一兄ちゃんの奥さんだもの。

修一 だってさ。(横にむかって)

祝子 私には見えないけどきつと素敵な人なのね、鈴子さん。

修一 うん、僕にとっては誰よりも。

祝子 わあ・・・

修一 よかったよ。いつもは誰かいる時は静かにしてるんだけど、今日は彼女も動揺したんだね、きつと。先代には内緒にしといてくれる？

祝子 うん、わかった。ねえ、鈴子さん成仏できなかったの？

修一 成仏はしかけてたけど、僕が引き止めちゃったんだよねえ。

祝子 あらら。

修一 鈴子さんが死んで悲しくてさ、毎日あちこちで飲んだくれてたら飲み屋で先代に拾われたんだ。

祝子 おじいちゃんらしい。呑んでばっかりね。

修一 もとは絵描きだったんだよ、日本画の。

祝子 あ、だからはんこも彫れるんだ。

修一 彫ったことはあったけど、専門の技術は先代に叩き込まれた。厳し

いのなんの。それが辛くて、鈴子さん戻ってきて、じゃないとやってらんない！って頼んだら本当に戻ってきてくれちゃって。

祝子 ダメじゃない、修一兄ちゃん勝手ねえ。

修一 無責任で薄情で勝手なんだ。

祝子 もう絵は描かないの？

修一 うん。はんこの方がちゃんとお金になるし嫌いじゃないから。

鈴子さんがいればそれでいいや。

修一、鈴子のいるであろう辺りをみつめる。

祝子 薄情ではないと思うよ。

修一 ……そうそう、話がすっかりそれちゃった。

祝子 なんだっけ。

修一 「テープがブツブツ切れる。」

祝子 ああ、ええとね、大型客船が出港する時紙テープを投げるじゃない、それで岸から離れるにつれてそのテープがブツブツ切れるで

しょ？あれ。結婚が決まってからずっとそんな感じで。

修一 独特だなあ。

祝子 わかんない？

修一　ごめんよ、まだちょっと。えっ？

修一、鈴子のいるであろう方を向く。

修一　鈴子さんわかるんだって。

祝子　さすが！

修一　うーん。

祝子　そうね、男の人にはわかりにくいかもしれない。

修一　やな展開、怖いな。

祝子　そんなじゃないよ。この間パスポート取った時、戸籍謄本を

見たのね。

修一　うん？

祝子　あれに結婚した家族・・・うちの場合お姉ちゃんの戸籍が書いてあ

って、お姉ちゃんの名前の所に除籍、って印がしてあったの。

凄くショックで、一緒に住んでるのに家族じゃないんだって

なんだか遠く感じた。

修一　書類の上だけだよ。

祝子　わかってる。でも、ああ、私もああなるんだって。

修一　・・・。

祝子　あの家で生まれて、いままでずっと過ごして来た内田祝子も

どこか遠い所に行っちゃうんだなって思ったら、まるで出港の紙テープを握り締めてるような気分になっちゃって。毎日少しずつテープが切れていくの。

修一
・・・うん。

祝子
結婚は嫌じゃないのよ？ただ暗い海に放り出されるみたいで。

男の人は大抵まだ苗字が残るでしょう？だけど私には何もなければ、だから最後にちゃんと内田祝子だった証拠を作っておこうと思ったの。

修一
・・・なるほど、よくわかったよ。

祝子
お願いできる？

修一
ああ、喜んで。

祝子
良かった。

修一
祝子ちゃんはやっぱり賢いね。

祝子
何で？

修一
そういう所。じゃあ内田の印は実印じゃなくてもいいんだ。

祝子
うん。

修一
ふうん、それなら・・・

祝子
なあに？

修一 落款印の篆刻石を使うか。

祝子 あの綺麗な石？

修一 うん。

祝子 やった！

修一 倉庫から何種類か出して揃えておくから明日好きな石を選びに

おいで。デザインもいくつか考えておこう。

祝子 ありがとう修一兄ちゃん。

修一 それとは別にもうひとつ「祝子」の印を作るよ。

祝子 え？

修一 こっちは黒水牛でね。

祝子 下の名前を？

修一 最近は結婚して姓が変わっても使えるように名前で実印を

作るお客さんも結構いるんだ。

祝子 そうなんだ！

修一 これは僕からのプレゼント。

祝子 嬉しい、いいの？

修一 勿論だよ、お祝いだもの。それともヤマギシさんの実印の方が

良かったかな。

祝子 うーん、じゃあ両方！

修一、笑う。

修一 やっぱり祝子ちゃんは賢いよ。ご注文承りました。

祝子 うふふ、じゃあ明日ね。楽しみ。鈴子さん、またね。

修一 ああ、また明日。

祝子、去る。

修一 ……現実には黒水牛よりも遅しいね。あの子は間違いなく幸せになるよ。

鈴の音がチリーンと鳴る。

修一 うん、とても素敵だと思う。

鈴の音がチリーンと鳴る。

修一 僕はいんだよ、これで。実印より、脆い落款のほうが好きなんだ。

だから僕が死ぬまで成仏しないでくれよ、鈴子さん。

修一、仄暗い作業机に座り、再び落款を彫り続ける。

【終】